

山の神様？ハブってどんな生き物？

ハブはクサリヘビ科ハブ属に分類されるヘビ。日本では最大の毒蛇であり、かつ、もっとも危険な毒蛇です。今では血清が作られているため、かまれても命をおとすことは少なくなりましたが、対応が遅くなれば絶命することも珍しくありません。ハブの毒は筋肉や血管を破壊する出血毒であり、命をとりとめても体の組織が大きく損なわれて、身体の自由が失われるなどの重い後遺症が残る場合があります。

ハブは南西諸島において、まるで飛び石のように分布しています。北からトカラ列島、奄美群島と沖縄諸島、八重山諸島には生息していますが、宮古諸島にはいません。また、奄美大島、徳之島、沖縄本島にはいますが、その間の沖永良部島、与論島にはいません。近接した島でも生息する島と生息しない島に分かれているのです。

奄美では古くからハブを「マジムン」(魔物)と呼び、伝承では神の使いであるとされています。猟師や大工など、山に入って仕事をする人々の家には山の神様の祭壇があり、毎朝「あらかもの除きたまえ」と唱えて拜むのが習わしとされていました。「あらかもの」とはハブのことです。奄美の人々は山へ入る時はハブを畏れ、山の神に対し呪文を唱えることで、安全を祈願したのです。ハブの存在は森への恐怖心を人々にもたらし、そのために奄美をはじめとする南西諸島の森には、長らく人の手が入ることがなく、結果的にそれが森林の良好な自然環境を守ってきたとも考えられています。



■ハブの子ども



■攻撃的な姿勢から、体の2/3の長さまで飛びついて噛み付く



■毒を持つずるといキバ



■生息する場所や個体によって模様が異なる